



絞りジャンボのれん 新作展示

絞会館の東外壁に6月と7月、2枚の絞りジャンボのれんが掲げられていたのをご存じの方も多いのではないでしょうか。1枚は1年前に製作されたもの、広重の浮世絵をベースにした絵柄でこれまでも駐車場入口に吊されていることがありました。他方、写真は今年の新作です。斬新な絵柄で8種類の絞り柄がパッチワーク風にデザインされています。



右:涼しげな風鈴

左:絞りのれん



保存修理に関する陳情書提出 (7月15日)

愛知県の有形文化財に指定されている井桁屋は、重伝建地区内の最重要建造物であるばかりでなく、同住宅が核になって日本遺産に認定されました。今後も愛知県の観光・文化振興に大きな役割を担うと考えられます。しかし、残念ながら制度の狭間に陥り、保存修理事業の補助額が名古屋市の伝統的建造物群保存地区補助金で支給される額を下回る状況になっています。

そのため、名古屋市を下回らないような支援をお願いするために、有松まちづくりの会として愛知県の大村秀章知事に「陳情書」を提出しました。



有松一里塚の清掃 (8月1日)

年2回ほど地域の皆さんの手で清掃活動が行われています。この日は猛暑日一步手前の34℃。有松まちづくりの会やあないびとの会・コンソーシアム有松の皆さん約15名が、活動の中心的存在である鋤柄通雄さんの掛け声で主に草刈りを行いました。草刈り機が3台用意されていたこともあり、1時間ほどでゴミ袋が23個にもなりました。

一里塚の維持管理を今後につなげていくために、より多くの方に担っていただくためにも組織の見直しが急務と感じました。



中央が鋤柄通雄さん

「絞」「瓦」

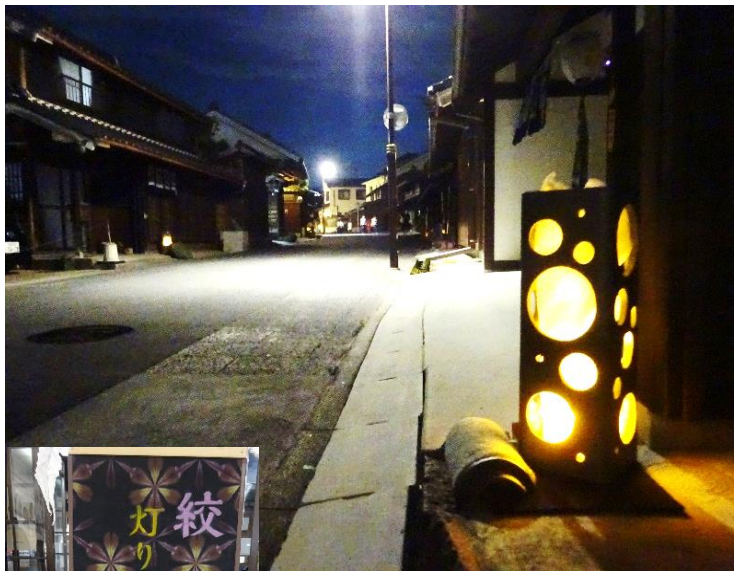
灯りストリートin有松 始まる (8月7日～11月14日)

8月7日から東海道沿いに灯りストリートが出現。まずは西町に灯りオブジェが30基設置され有松の夜を彩っています。

お盆前後は梅雨のような長雨があり訪れる人もまばらでしたが、カメラを手にオブジェを1基ずつ撮っている人や家族で幻想的な光景を楽しんでいる人も見られました。

「我が家の玄関に1つ置きたいね」などの声が聞こえてきました。

オブジェをよく見ると同じものが一つとしてありません。女性鬼師 伊達由尋氏の手により、右写真のように側面が様々な形に切り抜かれ窓が付けられています。その中に染色家 久野剛資氏制作の絞り作品が飾られています。中の光が作品を照らし、瓦の窓から漏れる優しい光が周囲をほのかに照らしています。



西町の光景
/ 様々なオブジェ



江戸中期の大火で町のほとんどを焼失した有松にとって、町の復興を担った三州瓦は欠かせな存在です。その「瓦」と「絞」という伝統産業の強い結びつきを感じていただきたくこの企画が生まれました。訪れる人に穏やかな気持ちになっていただけたらと、関係者の方は語っていました。

《 想い インタビュー2021.5.25 》

久野剛資氏に灯りストリートを企画した想いを伺いました。

コロナ禍の中、密にならない出会いの場を設けたい。絞りという伝統産業と重ねて見られる有松の美しさを広めたい。瓦職人との出会いの中で、右写真の試作品が生まれた。箱状の瓦に不燃加工した布を入れ、灯りを加える。夜、その灯りに人が集まる。街道全体が展示場だ。有松に人を呼び込みたいのは、地域産業活性化のためでもある。まずはものづくりを楽しんでやろうとする人が増えて欲しい。硬直化している伝統産業にクリエイティブな発想を呼び戻したい。ささやかな一石になれば・・・(文責:伊藤)



絞りと瓦の試作品

絞りうちわ作り (7月6日)

有松あないびとの会では、絞りへの理解を深めるため”まり木綿”の村口実梨(まり)さん(写真左)を講師にうちわ作りをしました。雪花絞りの技法で和紙を染めうちわを作ったのですが、刷毛での色付けが思った以上に難しいようでした。

近年、有松では”まり木綿”さんのように若い方も職人として生産現場に加わってきています。ありがたいことです。



嵐絞り・本藍染ワークショップ見学記（7月24日）

6月から始まった早川嘉英氏による本藍染を学ぶ教室。前はTシャツ制作の現場を見せていただきましたが、今回はストールを嵐絞りで絞り染めるところを見学させていただきました。参加者は4名。一人約30分の実習です。ワークショップという形で行われたので、早川氏が仰る通り「互いに教え合うことで、よりやり方を覚えることができる」と感じました。

《作業の様子》

- ① ストールをステンレス製筒(長さ2m)に斜めに巻き、等間隔に糸を巻く。
- ② 数十cm巻いたら片側に左に回しながら押し縮める。3回ほど繰り返して生地全部を絞る。
- ③ 生地を巻き付けたまま筒を外し、水槽につける。
- ④ 藍を天然灰汁発酵建てした染槽(幅2m深さ1m)につける。何回も入れると濃くなる。防染できるようにきつく巻きつける、等間隔に糸を巻くなど初心者には難しい実習のようでしたが、「ストールならそれなりに面白いものができますよ」との早川氏の言葉に参加者の皆さんは萎縮することなく作業に励んでいました。しかし、他方で「昔の嵐職人は、浴衣1枚同じ柄に絞っていた。未だにできない」と、嵐絞りの難しさや奥深さも参加者に伝えていました。

9月からはワークショップ第2弾として、7ヶ月の期間をかけて有松絞りの各技法を学ぶ「絞リスクール」が開講するとのことです。

国際芸術祭「あいち2022」説明会（8月23日）

愛知県は2010年より現代美術を中心とした国際芸術祭を開催していますが、2022年の会場の一つとして一宮・常滑とともに有松でも開催されます。

「あいち2022」への理解を深めていただくための説明会が絞会館で、芸術監督片岡真美氏(写真)をお迎えして行われました。テーマはSTILL ALIVE 今、を生き抜くアートのちから。有松を会場に選んだのは、この地が地域産業や伝統工芸など固有の文化的伝統を持っているから。近代以降、染織は工芸として美術とは一線を画するものとされてきたが、近年工芸と美術を横断する表現が再評価されてきており、再考する場としたいようです。



左:作業中の参加者 / 右:蔵工房(作業場所)



① 糸を巻く ② 押し縮める



③ 水につける ④ 染める



町並み案内で受けた質問から③ 有松あないびとの会 伊藤総俊

「Q3 どうして東海道の道沿いには石などが置かれてあるのですか？」

直射日光を避けるため、有松では古いお店の庇が出っ張っています。車の通行など考えていない時代のものなので、背丈の高い車が道路端に寄ってくると庇にぶつかることがありました。その予防策として石など障害物を置くようになったそうです。井桁屋さんの前には、石臼やブロックも設置されています。これもまた有松が染織町であることを物語っているのです。

平成25年(2013)3月23日の東海道無電柱化完成に伴い、一方通行が実施されました。以後、車は道路中央を走るようになり石の役割も少しは減ったようです。

*「有松東海道無電柱化の会」の7年に渡る活動により実現しました。

右写真:中濱商店前



お奨めスポット

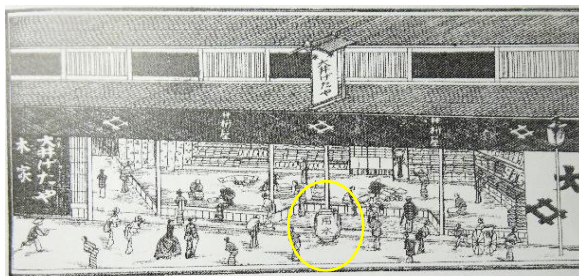
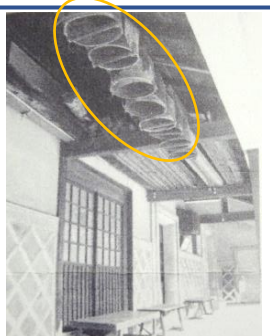
西町を歩いていると、民家の前に水槽①が置かれていることに気づいた。その涼しげな光景に暑さを忘れると共にかつての有松を思い起こさせるものであった。②は広重53次の浮世絵の一部である。初期消火に必要な用水が各戸の前に描かれている。③は明治初めの大井桁屋(現棚橋家住宅)である。中央に“用水”と書かれた用水桶が描かれている。有松にも、至る所に用水が

②①
③



懐かしの写真

かつて井桁屋さんには文久元年(1861)頃の防火桶が中庭の軒下にありました。桶は竹で編まれ黒い和紙に柿渋が塗ってありました。火災の時の手渡し消火に備えたものでしょう。



尾陽商工便覧:明治21年(1888)

催事・行事の予定 ※新型コロナウイルス感染拡大防止のため変更になることがあります。

～11月14日(日) 17:00 灯りストリートin有松 有松東海道 コンソーシアム有松

9月 4日(土) 13:00 早川嘉英の藍染ワークショップ(毎週土曜日開催) 蔵工房

9月12日(日) 15:00 町家ライブ「初秋のオトイロドリ」 棚橋邸 同実行委員会

9月13日(月) 18:00 有松町並み相談会 コミセン

9月18日～20日 10:00～16:00 有松のまつり伝承展 山車会館・棚橋邸 有松日本遺産

9月26日(日) 7:30 かえで道清掃 有松まちづくりの会 推進協議会

9月26日(日) 15:00 町家ライブ「三味線ライブ」 日本料理「やまと」 同実行委員会

9月27日(月) 18:00 有松まちづくりの会役員会 コミセン



発行 者:竹田嘉兵衛(有松まちづくりの会 会長)

編集 者:加藤 一成(有松まちづくりの会 広報部員)

T・F 052-623-1676 090-4163-2671

E-mail katoisse@mc.ccnw.ne.jp

有松まちづくりの会は、ホームページを公開しています。

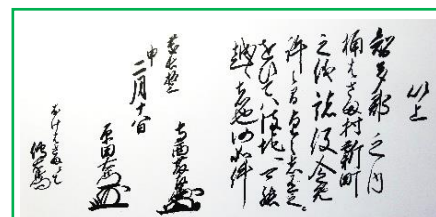
有松のまち

検索

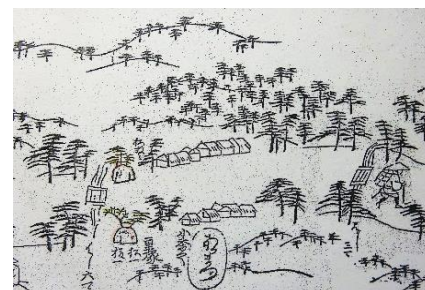
2 有松村の成り立ち

○ 有松村の成立

関ヶ原の戦いが終わり徳川家康が最初に手を付けたのが東海道の整備。慶長6年(1601)から、宿と認めるから公用交通用として駅を準備して欲しいというお触れを出した。現在の国道1号線にまわりつくように東海道は走っている。この辺りは熱田から鳴海まで干潟でだんだん陸地化が進み、中世の道であった古鳴海から二村山に替わり、池鯉鮒(知立)から鳴海間が整備された。鬱蒼として強盗・追剥ぎが出るし宿間が3里強あるので、人が休めるところが必要と慶長13年(1608)に桶狭間村の新町として移住者を募りできたのが有松である。最初に越してきたのが8名、寛永2年(1625)までに29名となった。「東海道綱目分間之図」(元禄3年1690)には一里塚に続く町並みが描かれている。



触書



東海道綱目分間之図

○ その後の有松村

人口の推移だけを見ていくと、70年で家数・人口共に3倍以上。天明のは下人が含まれているので除くと500人程。「徇行記」は間違い。他資料で約185軒では。

〈人口の推移〉

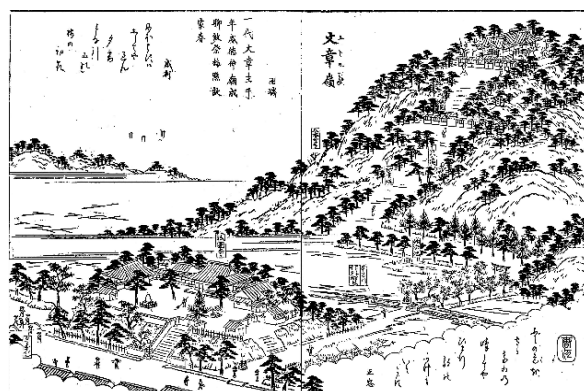
寛文11年(1671)	31戸/151人	「寛文村々覚書」
延享2年(1745)	118戸/469人	「愛知郡村邑全図」
天明元年(1781)	111戸(建造物242)/610人(内下人121人含む)	「知多郡有松村家並改帳」
文化・文政	118戸/469人	「尾張徇行記」 * 延享2年の数字

○ 18世紀半ば以降の村の変化

どの様に村が変わってきたのか。祇園寺は鳴海にあった猿堂寺が宝暦5年(1755)に移転してきて名を改めたもの。祇園寺のお坊さんがいらだいてきた天神さんを、村人の願いで祇園寺が持っている山の中に移して氏神として崇めるようになった。寛政の初め(1789~)と考えられている。

おそらく人口が3倍になった18世紀の半ば頃に、自分たちの氏神様も持ち、村の形ができてきたのではない

だろうか。そんな時に天明4年(1784)に大火が起こり、絞り屋もたくさん焼けた。猿猴庵「東街便覧図略」に描かれた竹田庄九郎家のように草葺きの屋根で軒だけ瓦葺きなのから徐々に縦瓦葺・卯建・塗籠造の防火対策が施された建物が建てられるようになった。下絵左は天保2年1831)建造の東竹、右は舩屋。



18世紀後半、有松にとっては大変な時期とも言われるが、まち全体としてみれば、決してそんなことはないのではないかとと思う。

寄稿

有松の町並みと瓦 有松あないびとの会 山村幸雄

写真は302号線からの風景です。有松の町並みと瓦が
いかに深く関係しているのかを物語っています。先日、
あないびとの例会で瓦についての興味深いお話がありま
したので、その一部を紹介します。

1 はじめに

松柏苑の裏の駐車場脇に、かつて中舛竹田家の屋根にあった
鬼瓦が2体展示してあります。文化年間(1810年前後)に建造。
特に右側には永坂奎兵衛の刻印が入っています。また、井桁屋
の鬼瓦にも同様の刻印が入っているそうです。主屋は文久2年
(1861)建造。有松では奎兵衛の名がちよこちょこ登場します。

天明の大火(1784)の後、有松は瓦葺屋根に変わっていきました。
その復興に尽くしたのが三州瓦の中心人物永坂奎兵衛なのです。

2 三州瓦とは？

三州瓦の起源は寛永年間(1623～1643)、矢作川流域
(安城市・岡崎市・西尾市)に岡崎城や西尾城の御用瓦
師がおり、太子講という瓦製造仲間が作られ結束が固
かったです。江戸での需要拡大により矢作川河口付近
(碧南市・高浜市)に瓦製造業者が増えていきました。



中舛竹田家の鬼瓦と刻印(永坂奎兵衛 作)

永坂奎兵衛家は棚尾村(現碧南市)で創業の天明8年
(1788)から昭和19年(1944)まで約150年間7代に渡り瓦製造を行ってきた三州瓦を代表する存在
でした。屋号の「奎兵衛」は三州瓦のブランドでした。この奎兵衛ブランドが有松に入ってきた
のです。特に、2代目は(宝暦7年1757～文久9年1826)京都で7年間(25歳～32歳)修業して当時
最先端の技術を学び、天明8年三河に持ち帰りました。以後三州瓦の評判は高まりました。

3 三州瓦の広がり

江戸の度重なる大火で甚大な被害が発生するようになり、瓦の防火機能がクローズアップされ
てきました。特に、享保の改革で大岡忠相が目安箱での意見をもとに火除瓦と言われた棧瓦葺き
を奨励し助成したため、江戸で瓦の需要が爆発的に高まりました。

そこに割り込んだのが奎兵衛ブランドの三州瓦。大浜港から積み出されました。知多のお酒が
「中国酒」として江戸でよく売れたように・・・船を使って江戸や伊勢などに運ばれ、飛ぶように
売れたそうです。栄国寺(名古屋市中区)本堂には「瓦屋奎兵衛 作」の鬼瓦があります。

三州瓦の名が高まると共に、奎兵衛家は自家製造だけでなく瓦問屋も兼ねるようになり、製品
納入に仲間の瓦製造業者の瓦も集めるようになりました。

4 おわりに

灯りストリートオブジェから→

有松は天明4年(1784)の大火以降、防火対策で三州瓦を取り入れるようにな
りました。お手本は江戸の最新の防火対策、棧瓦葺、漆喰の塗籠造、虫籠窓、
海鼠壁。上方から下る人は、京風の瓦より立派な有松のいぶし瓦を見て褒める。



江戸から上る人は、江戸の町を思い出し褒める。有松は三州瓦の見本市のごとく。幕末に有松に
来たたアーネスト・サトウは日本で最も清潔で美しい町、有松」の言葉を残しています。有松の
復興に永坂奎兵衛率いる三河瓦職人は貢献し、今も三州瓦は有松の町並みを守っています。